


 ずいそう

カンボジアで考えさせられたこと

中 田 利 治



2015/11/25 から 12/3 まで、いつも一緒に海外旅行をしている親しい仲間 12 人のグループでカンボジアのシェムリアップ、ラオスのルアンパバーン及びベトナムのハノイを旅行した。このうちカンボジアには 3 泊 4 日滞在した。その時の印象を記す。

カンボジアで最も驚いたのは、ホテルだけでなく土産物屋でもレストランでも日本語で対応してくれるスタッフがいることだ。それだけでなく、彼らが非常に親日的なことである。なかでもカンボジア滞在中アテンドしてくれた 2 人の青年ガイド（愛称パナ君とサビ君）の発言が印象に残った。

二人とも日本語が非常に上手である。親日的であるだけでなく、発言の中に日本に対する大いなる憧れと尊敬の念が感じられた。以下は、主としてパナ君が観光ガイドをする合間に教えてくれたカンボジアの実情の要約である。

カンボジアでは小学校と中学校は義務教育制が敷かれている（小学校では午前中に低学年、午後は高学年の 2 部制）が、カンボジア学校の教科は、読み書きそろばんだだけで、体育や音楽はないのだとのこと。しかも、就学率が 60% 程度と非常に低いとのことである。

理由は、カンボジアは農業国で子供が学校へ行くより、家で農業や牧畜の手伝いをした方がよいと考える親が多いからだという。また義務教育以上の学歴を積んでも役人（警察官）か学校の先生になるしか学歴を活かせる道がないことも一因とのこと。

警察官は（正規の給料以外にも収入を得ることが出来るので、《あくまで彼の弁で、真偽の程は確認できない》）生活には不自由しないが、先生は少し離れたところに赴任すると交通費や住宅費が掛かり、給料だけでは生活が成り立たないのだとのこと。

パナ君の実家も農家で、彼が学校へ行くことを父親が許してくれなかったのだが、向学心に燃えていた彼は、いろんなつてを頼って、日本人女性（和歌山県出身）が主催する NGO にたどり着き、そこで学校に通わせて貰っただけでなく日本語も勉強させて貰ったとのこと。

その日本人女性（彼はママと呼んでいた）に同世代

の友達数人と、2 週間ほど日本に連れて行って貰い、千葉県や和歌山県に滞在したとのこと。彼らが新幹線の速さにびっくりすることを心配したママさんから、乗ってすぐ睡眠薬（？）を飲まされたらしく、一眠りしたらもう新大阪だったので驚いたと笑わせる。

彼は訴える、カンボジアを日本のような立派な国にしたいが、悲しいかなポルポト政権下で、文字を読める人、眼鏡を掛けている人は全てインテリ階級と見なされ、殆どが抹殺されてしまった。

そのため、今のカンボジアには 50 歳代以上の層が非常に薄く、我々（パナ君ら）を指導してくれる人がいない。出来ることなら、人生経験の豊かな日本人の専門家に指導に当たって貰えたらいいと考えているのだがと。

彼の観光ガイドの内容も面白く我々を満足させてくれたことはいままでのない。しかし、何度も外国を旅行した経験はあるが、これ程までに自分の国の将来を思うだけでなく、日本国と日本人を評価してくれている外国人に会ったことはない。

パナ君のことばかりを書いたが、繁華街の土産物屋のどの店にも日本語を上手に話す売り子（女性）が少なからずいる。

我々が、お土産を買った店の売り子は、我々が去ろうとすると本とノートを出してきて日本語の勉強を始めたので、頼んで彼女が持っていた本とノートを見せてもらった。

本は古本屋で約 600 円（定価の 1/4 位）で買ったとのこと。独り者なら月 1 万円程で過ごせると聞いたカンボジアではかなりの出費であろう。ノートにはひらかなや小学校 2 年生レベルの漢字が丁寧に書かれていた。帰りしなに「日本の女性と話しているのと変わらないね」というと、すかさず「お世辞がお上手ね」と返された。

観光旅行のつもりで訪れたカンボジアで、これからの日本国と日本人が彼らに何をしてあげられるかを考えさせられたのは、想定外の出来事であった。

——なかた としはる 元（一社）日本建設機械施工協会
関西支部 技術部長——